「聖霊による号令」使徒の働き　2章1-13節

2025.6.8　ペンテコステ礼拝

序論）

みなさん、ペンテコステおめでとうございます。

今年も、みなさんとこうして一緒に聖霊様が教会に与えられたことを覚えて礼拝ができることを感謝いたします。

今日は残念ながら私の娘がいません。なぜならば、今日は富川小学校の運動会の日だからです。実は、最近は平取や振内の小学校は日曜日じゃなくて土曜日に運動会をしているそうで、富川小学校も運動会を土曜日にしてほしいと要望したのですが、聞いてもらえず、ペンテコステという大切な日に運動会が被ってしまいました。

運動会といえば、100m走や200m走など速さを走る競技がおおくありますが、そういった徒競走ではスタートダッシュはとっても大切なことだと言われています。なぜならば、スタートの号令がなってスタートするまでの時間が0.5秒違うだけで、トップアスリートなら3mの差がついてしまうと言われているからです。

ペンテコステは、聖霊の降臨によって教会が誕生した日といわれていますが、今日の箇所を読んでみると教会が教会として宣教を開始した日と理解する方が適切かもしれません。

激しい風のような音が家中に響き渡って、炎のような舌が現れるというこの不思議な現象は、【主】が教会に聖霊様を与えることによって宣教開始の号令を鳴らされた出来事なのではないでしょうか。

ここ数年、ペンテコステのメッセージは使徒の働き以外からお話してきましたが、改めてペンテコステの出来事、そのものを扱っている今日の箇所から、【主】がこの日に何をなしてくださったのかを改めて確認していきたいと思います。

今日は、わかりやすく**「いつ」「どのように」「何をした」**というキーワードで、ペンテコステの出来事をみていきます。

１）いつ　　-　五旬節、みなが集まっていたときに

2:1 五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

ペンテコステの出来事は、五旬節の日に、【主】の弟子たちがみんな同じ場所に集まっていた時に起こりました。

五旬節というのは、ヘブル語ではシャブオット、七週の祭りと呼ばれます。これは過越の祭りから数えて7週した翌日、すなわち50日目に祝われる祭りで、元々

は、小麦の初穂を神様に捧げる収穫感謝の祭りでした。レビ記にはこのようにあります。

レビ記
23:15 あなたがたは、安息日の翌日から、奉献物の束を持って行った日から満七週間を数える。
23:16 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物を【主】に献げる。

そして、ユダヤ人たちはこの【主】が定められた収穫感謝祭に、もう一つの意味を加えます。それはこの日は、シナイ山で【主】がイスラエルに律法を与えられたことをおぼえる日という意味です。

旧約聖書自体は、この 7 週の祭り、ペンテコステが、ユダヤ人たちがいうようにイスラエルに律法を与えられたことをお祝いする日とは説明していません。しかし、**出エジプト 19:1 には「エジプトの地を出たイスラエルの子らは、第三の新月の日にシナイの荒野に入った」**と書かれており、この「第三の新月の日」とはまさに 7 週の祭りが開始される日とかさなっています。【主】は、イスラエルが入ったシナイにおいて、モーセを山に呼びだし律法をお与えになったのです。ですから、7 週の祭りが、律法授与の記念日というのも、全く聖書的根拠がない話でもありません。

少なくとも、ペンテコステ当時の使徒たちや弟子たちはユダヤ人たちでしたから、この日が収穫祭であり、律法授与の記念日であることは意識していたと思います。

そして、【主】イエスキリストのお約束の通りに、この日に聖霊様が教会に与えられたことによって、聖霊という石板ではなく、心に刻む律法が与えられ、教会による宣教という魂の収穫の御業がはじまることになったのです。

だから、パウロはキリスト者に聖霊が与えられていることをこのように言っています。

コリント人への手紙　第二
3:3 あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは、明らかです。それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。

五旬節とよばれるペンテコステは、【主】が、教会の人々の心の中に、聖霊という律法を与えられ、宣教という魂の収穫スタートさせた日です。

2）どのように　- 聖霊にみたされて

次にこのペンテコステの日に、【主】は教会をどのようにされたのか。ということをみていきたいと思います。2 節を一緒に読みましょう。

2:2 すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。

当時、弟子たちはどうやら家に集まっていたようです。この弟子たちが集まっていた「家」とはどこなのか？　ということについては、2 つの見解があります。

一つは、私達が「家」と呼ばれて普通にイメージする個人の家です。使徒の働きには「家の教会」ということばが出てきており、確かに初代教会時代にはキリスト者たちが個人の家に集まっていました。

ところが、1 節には「皆が同じ場所に集まっていた。」と書かれており、1 章 15 節をみると「**そのころ、百二十人ほどの人々が一つになって集まっていた**」と書かれているので、ペンテコステのときに集まっていた弟子たち、キリスト者たちは、少なくとも百二十人以上いたと思われます。

みなさん、自分の家に 120 人以上の人を入れることができますか？できないですよね。20 人だって個人の家にいれるのは難しいと思います。そして、この出来事の後、ペテロが説教をし、なんとその日の内に 3000 人ほどの人がバプテスマを受けて、仲間に加えられた（2:41）そうなので、その日のうちに 3000 人にバプテスマを授けることを考えると、**ここでいう（2 節）**「家」というのは個人の家ではなくって、神殿の前に洗礼をする場所が備えられていたエルサレム神殿ではないか。と言われています。実際、エルサレム神殿は「【主】の家」とか、「祈りの家」と呼ばれていたので、私もこの出来事があったのはエルサレム神殿だったと思います。

【主】はこのペンテコステの時に、天から激しい風が吹いてきたような激しい音をエルサレム神殿中に響かせたのです。**旧約聖書において「風」はヘブル語でルーアハです。これは「息」や「霊」を意味しています。これはギリシャ語でも同じで、2 節で「風」と訳されているギリシャ語プノエーは、やはり「息」や「霊」を示しています。**

みなさん、神様から息が吹きかけられるといわれて思い出すことはなんでしょう

か。恐らく聖書を知っている多くの人が思い出すことは、【主】が人をお造りになる時に、大地のチリを集めて形造り、そこに【主】がいのちの息を吹きかけられたことによって、人が生きるものになった。といわれているあの創世記 2 章 7 節の出来事ではないでしょうか。

旧約聖書にはその箇所以外にも、エゼキエル書 37 章 9 節をみてみると

エゼキエル 37:9
そのとき、主は言われた。「息に預言せよ。人の子よ、預言してその息に言え。『【神】である主はこう言われる。息よ、四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。』」

と書かれており、【主】が言われる「息」というのは、人にいのちを与えるものであることがわかります。

神様は、聖霊様という息によって、わたしたちにいのちを与えてくださるお方なのです。恐らく【主】が教会に聖霊をお与えになるときに、激しい風が吹いたような音を響かせたのは、私達にそのような意味を悟らせるためだったのではないでしょうか。

そして、【主】はこの時に、さらに象徴的な出来事を起こされます。それが 3 節

2:3 また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。

炎というのは、裁きの時に【主】が用いられる。そのようなイメージがありますが、【主】がモーセとお会いになったときに、燃える柴をお見せになったことからもわかるように、炎というのは【主】の臨在、それも神様の力強い性質を示すような時に、「炎」が用いられます。

しかも【主】はこの時に、炎のような「舌」の形をとって一人ひとりに降られました。**「舌」を示すギリシャ語はグローッサ、これは「ことば」「言語」**を示すギリシャ語でもあります。恐らく【主】は、聖霊様によって弟子たちに力強いことばを与えるしるしとして、このような形をとられたのだと思います。

だから、結果としてどうなったかというと、4 節

2:4 すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことば

で話し始めた。

弟子たちはペンテコステの時に聖霊に満たされたのです。

私は最初にスタートダッシュの話をしました。
【主】が弟子たちに激しい風が吹いたような音を聞かせて、それが神殿中に響きわたって、さらには、炎のような舌という非常に象徴的な形を見せながら、弟子たちを聖霊様によって満たされたのは、まさに教会がこれから、聖霊に満たされて歩む。　という、その歩みが始まったことをしめすスタートの号令として、このような象徴的な出来事をなさったのではないでしょうか。

だから、この号令がなった後に生きている私達もまた、聖霊に満たされて歩む教会とされているのです。
みなさん、聖霊様はみなさんにいのちを与え、【主】の臨在をしめし、そして、証しすることばを与えてくださるお方です。

3）何をした　　-　御霊がかたらせるままに話し始めた
だから、この聖霊に満たされた教会は何をしたか。というと、**(4 節表示)「御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話はじめたのです」**

この「他国のいろいろなことばで話はじめた」というのも非常に象徴的な出来事だと思います。では、御霊様はここで弟子たちに何を語らせたのでしょうか。**11 節には彼らが「神の大きなみわざ」を語っていた**と書かれています。
また、イエス様が聖霊様のことを教えてくださった時には、このように言われました。ヨハネの福音書 14 章 26 節

ヨハネの福音書 14:26
しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

聖霊様は、神様の大きなみわざと、【主】イエスキリストのみことばを私達に教えてくださり、それを私達に語らせてくださるお方です。
しかも、この時にはただ語るだけではなくって、ことばの壁を乗り越えて、いろ

いろなことばで福音を語らせてくださったのです。

9 節から 11 節にはこのときにどんな人達が、弟子たちの周りに集まっていたかが書かれています。

2:9 私たちは、パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、
2:10 フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、
2:11 ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。それなのに、あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは。」

パルティア人とか、メディア人といわれても恐らくみなさんにはピンとこないと思いますので、このときエルサレムにはどのような地域から集まっていたかを図で示すとこのようになります。

（PPT 上の町の名前の部分を囲ったところを示す）
このように見ると非常に多くの地域からエルサレムに集まってきていたことがわかります。彼らの多くはディアスポラと呼ばれる色々な地域に離散したユダヤ人です

が、エルサレムに集まってきたのはユダヤ人だけじゃなくって、11 節で「改宗者」と呼ばれているユダヤ教に改宗した異邦人たちもいました。

彼らは 1 年の中でたった一日だけ開かれる七週の祭り、ペンテコステのお祭りに参加するために、世界各地からエルサレムに集まってきたのです。
みなさん、これは結構すごいことですよ。

このペンテコステの祭りの前後には、過越の祭りと仮庵の祭りがあるのですが、この 2 つの祭りは 7 日間かけて行われます。でも、このペンテコステ、七週の祭りだけはたった一日だけです。遠く離れたところから集まってくるというのは大変なことです。

一番近いユダヤの人はいいとして、次に近いアラビアからだとエルサレムまでの移動には、最低でも一週間、普通に休息や安全を確保して旅をしたら 2 週間ぐらいはかかりました。ましてや、一番遠いローマからだと 1 ヶ月以上かかることもあったと思います。たった一日のためにそれほどの時間をかけてエルサレムにくるということは、よっぽど信仰心が厚くないとできないことだと思います。

だからこの時にエルサレムに集まってきていた人たちは、ユダヤ教ではありますけども、非常に敬虔な人たち（5 節）でした。
そして、聖霊様はそんな色々なところから集まった人たちに、それぞれの人達にしっかり伝わることばで、神様のこと、そして、キリストのことを語らせたのです。

みなさん、私達を満たしてくださる聖霊様は、たとえことばの壁があったとしても、それを超えて福音を語らせてくださるお方です。この出来事は非常に象徴的な出来事ですから、「聖霊様が働いてくださるから国外宣教するときにそれぞれの国のことばを勉強しなくてもいいや」とはなりません。しかし、聖霊様は私達が福音を語る時に壁となるものを乗り越えさせてくださり、救われる人たちに確かに福音を語らせてくださるお方なのです。

もちろん、聖霊に満たされて福音を語ったから、その福音を聞いたすべての人がすぐ福音を受け入れることができるというわけではありません。実際、弟子たちが

色々な国のことばで語っているのを聞いた人たちは、その事自体に当惑したし（12節)、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」といって、馬鹿にする人もいました（13節)。

でも、それはそれでいいのです。なぜならば、**『十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力』（Ⅰコリント1:18）**だからです。ですから、みなさん、私達はコリント人への手紙を学んでいる時も教えられましたが、自分は上手に話せないのではないか。相手を信じさせるだけのことを言えないのではないか。という恐れがあったとしても、それを心配しなくてもいいのです。

なぜならば、私達を満たしてくださる聖霊様は、あのバベルの塔の時からはじまった言葉の壁、言葉の混乱さえも乗り越えて、私達に福音を語らせてくださるお方だからです。

結論）

ペンテコステの日に【主】が教会に聖霊様をお与えになったのは、ただ「不思議な出来事」を体験させるためではありませんでした。それは、神様の救いのご計画の中で、教会が宣教をはじめるためのスタートの号令だったのです。

聖霊様は、教会にいのちを吹き込み、【主】の臨在を示し、そして、語るべきことばを与えてくださいました。さらには、ことばの壁を越えて、「神様の大きなみわざ」を力強く語らせてくださったのです。

その恵みは、今も、私たちの上にも注がれています。

私たちは、この聖霊による号令を受けて、歩み出した教会の流れの中に生きています。私たちもまた、聖霊様に満たされ、語るべきことばを与えられ、行くべき場所へと導かれる【主】の民です。

だから、たとえ自分に自信がなくても、うまく話せるか心配でも、みなさんに福音を語らせてくださる聖霊様を信じて、このお方の導きに耳を傾けていきましょう。

ペンテコステは、教会が聖霊様によって宣教のスタートダッシュをしはじめた日です。

ですから、どうかこのペンテコステの日に、みなさんも新たな決意をもって、

「聖霊様、どうか私を満たし、あなたのことばを語らせてください。宣教の働きへと私を遣わしてください。」と祈ってみましょう。

【主】は、その祈りに応え、聖霊様の満たしを与えてくださると信じます。

ルカの福音書 11 章 9 節、13 節を読みましょう。
11:9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。
11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

それぞれ応答の時をもちましょう。